「我が後か」にみる婚姻と時代性

――『夜の寝覚』の男君の発言に関連して――

高橋由記

はじめに

『夜の寝覚』巻一で、男主人公（以下、男君）の子を身ごもった女主人公（以下、女君）は、対の君や異母兄宰相中将の計らいで密かに女児（＝石山姫君）を出産した。女児は母を秘して男君の父関白の邸に引き取られ、関白夫妻は「まだ見えぬ顔つきにて、二所して抱きうつくしみたてまつらせたまふ」（巻二、一六四頁）と女児を慈しんだ。男君に女児がいることを知った男君室の大君は「いとなべて世の中恨めしく、ものしげ」（巻二、一六七頁）な様子で、男君は「ひとりはべりしほど、ときどきうち忍びつつ通ひし所に、かかることのありけるも、知らざりけるほど」と弁解した。それでも「身の宿世つらくおぼし知られて、やすげなき御気色」（巻二、一六七～一六八頁）な大君に対し、男君は「わりなしや。生まれたるほどをおぼせ。我が後かと。たとひさるにても、男はさのみこそはべれ。」（巻二、一六八頁）と語った。男君の発言は、大君との婚姻後に新たな女性との関係が始まったのではないのだから大君の不満は道理に合わない、というものだろう。男君のことばを聞いたからといって、大君の嘆きや不満が薄らぐはずもないが、それでも、「我が後か」という主張にも正当性があるからこそ、男君も発言したのだろう。小論は、男君の発言を端緒にして、複数の女性との婚姻や恋愛が認められていた平安貴族社会の婚姻の特徴の一端や時代性を明らかにすることを目的とする。なお、小論でいう「婚姻」「結婚」は、たとえば親の勧めで成立したものや、社会的にも認められた子女がいることなど、男女の関係がある程度継続し、社会的にも両者の関係が認められたものをさす。「妻室」は、そのような関係にあると思われる男女間の、女性の意で使用した。また、天皇や東宮にとっての妻室の意で「キサキ」の語を用い、立后したキサキの意の「后」と使い分けた。

一　「人よりさきに」

妻室たちの対抗意識について、増田繁夫氏は、『蜻蛉日記』を一例として「妻たちは、一般によくいわれるように、夫の「愛情」といったあやふやなものを第一に求めていたわけではなかった。（中略）何よりも自己の社会的地位としての「妻の座」こそが第一義の関心事だったのである。[1]」とする。たしかに、道綱母にとっての時姫や町小路女は「妻の座」に関わる存在だろう。しかし、『夜の寝覚』

の当該箇所で、男君は、女児の母との関わりを「ひとりはべりしほど」（巻二、一六七頁）のことだと大君に語っている。女児の母を妻室と認識していないという弁解だが、にもかかわらず、男君は大君に「我が後か」と語った。関わりの生じた後先を理由にして、男君は大君をなだめようとしたわけだが、後先という観点で当時の婚姻や恋愛関係を考えるとき、まず思い浮かぶのは、「我が後か」ではなく、最初の妻室を特別視する考え方ではなかろうか。青島麻子氏は、「『源氏物語』には幾多の女性との関わりが描かれてはいるが、その中でしばしば「初妻」というものに対する特別な感情が見受けられる。[2]」とし、『源氏物語』において、薫が浮舟の存在を女二宮に打ち明けたときに、浮舟を「年経ぬる人」と言ったことや、『蜻蛉日記』において、道綱母が自らより後に出現した町小路女や近江に対しては憎悪とも言うべき激しい感情を抱いていたのに対して先妻時姫には一歩譲るような描き方をしていることを例に挙げる。実際、物語においては、以下にあげるように「人よりさきに」関わりを持った女性を特別視するような考えが見える。

○『源氏物語』

【1】桐壺帝による、弘徽殿女御への思い

人よりさきに参りたまひて、やむごとなき御思ひなべてならず、（桐壺、①一九頁）

【2】源氏による、葵上への思い

人の御ありさまの、かたほに、そのことの飽かぬとおぼゆる疵もなし、人よりさきに見たてまつりそめてしかば、あはれにやむごとなく思ひきこゆる心をも知りたまはぬほどこそあらめ、（紅葉賀、①三一六頁）

【3】冷泉朝における立后争いについての、貴族社会の反応

源氏のうちしきり后にゐたまはんこと、世の人ゆるしきこえず、弘徽殿の、まづ人より先に参りたまひにしもいかがなど、内々に、こなたかなたに心寄せきこゆる人々、おぼつかながりきこゆ。（少女、③三〇～三一頁）

【4】今上帝による、藤壺女御（＝女二宮の母）への思い

そのころ、藤壺と聞こゆるは、故左大臣殿の女御になむおはしける、まだ春宮と聞こえさせし時、人よりさきに参りたまひにしかば、睦まじくあはれなる方の御思ひはことにものしたまふめれど、（宿木、⑤三七三頁）

○『狭衣物語』

【5】嵯峨帝による、故大宮（＝女二宮の母）への思い

内裏にも聞かせたまひて、人より先に参りたまひて、あまたの宮たちもおはしませど、睦まじうやんごとなきかたに思ひきこえさせたまへるを、何ばかりの御齢のつもりにもあらでかく別れさせたまひぬるを、いかがはよろしう思されん。（巻二、①二二二頁）

【1】【3】【4】【5】は、最初に入内したキサキに対しての帝や東宮の思いである。青島氏は「最初に入内した女御を重んじる思想とは、同時代の人々にも通底する意識であったと言えよう。」「多妻が推奨されるはずの後宮においても、新参の后妃よりも早くから入内している后妃をある意味「正統」なものと見なす思想が一方では存在するようである。」とする。服藤早苗氏は史料を調査して、副臥を「天皇・東宮・準東宮の元服に選ばれ参入する女性、とするべきではなかろうか。」とした上で、「副臥女性が、すべて正式な女御

や妃、さらには皇后になっている、あるいはなったであろうと推察される」とする。[3]『源氏物語』や史上の例をみると、最初に入内したキサキが特別扱いを受けたというよりは、最初に入内するキサキは有力貴族の女だったといえようが、いずれにしても、物語において、最初に入内したキサキは、帝や東宮の心内において特別視される存在だったといえる。【2】は源氏にとっての葵上だが、【1】【3】【4】【5】と同様に、源氏は初めての妻室である葵上を特別に思っていたという。『夜の寝覚』においては、男君自身「これは、今始めたる我が過ちにもあらず。かかるべかりける契りばかりを、（以下、略）」（巻二、一七三頁）と、女君とのことは今始まったことではないと思い、女君の乳母子少将の君も「やむごとなく、え去りがたき元結にて、上おはす。うちうちこそ、これより先の契りと浅からず見ゆれば、さるべきにこそ、かくも乱れたちぬれ。」（巻二、一九二～一九三頁）と、女君と男君の関わりは、正妻大君より「先の契りと浅からず」思っている。これらの用例をみると、妻室（あるいは、恋愛関係）になった後先も、複数の女性との関わりが認められていた当時において、意味あるものだった。その他、「人よりさきに」という考えは、恋愛に関連して、男性が、ある事柄について、他の男性よりも自分の方が先だったと思うときにも使われている。[4]当然のこととともいえるが、後先において、先であることを優位とする考え方は存在していた。

しかしながら、男君は大君に「我が後か」と弁解した。この主張は、より早く関わりが生じた女性を優位とする考えとは異なる考えに基づいている。実際には女児の母は太政大臣女の女君だが、仮に、女児の母が妻室として認められる身分ではないとしても、男君が大君よりも早く関わりを持った女児の母の優位性を主張して、大君をなだめるはずがない。より早く婚姻（あるいは恋愛）関係が生じた女性を優位とする考え方とは別の考え方があったということである。

二　「我が後か」

『源氏物語』をはじめ、男性の心内において最初に入内したキサキや、最初の妻室が特別な存在だったらしいことは確認した。しかし、特別な存在だとしても、最初に入内したキサキが必ず立后するわけではない。桐壺帝の後宮に最初に入った弘徽殿女御も、冷泉帝の後宮に最初に入った弘徽殿女御も、妻后にはなっていない（弘徽殿大后は、朱雀帝の母としての立后）。今上帝の藤壺女御も同様である。また、朱雀院女三宮の処遇について、源氏は「ただ内裏にこそ奉りたまはめ。やむごとなきまづの人々おはすといふことは、よしなきことなり。それにさはるべきことにもあらず。かならず、さりとて、末の人おろかなるやうもなし。故院の御時に、大后の、坊のはじめの女御にていきまきたまひしかど、むげの末に参りたまへりし入道の宮に、しばしは圧されたまひにきかし。」（若菜上、④四一頁）と、秋好中宮と弘徽殿女御がいる冷泉帝のもとへの入内を提案していた。他の人が先に入内していても、それは別の女性にとって入内の決定的な障りにならない。だからこそ、源氏も明石姫君の東宮への入内を遅らせたのだろう。とはいえ、源氏が明石姫君の入内を延期したのは、源氏の女が入内すれば、他の貴族が女の入内を控えるからである。栗本賀世子氏があげる入内断念の四つパターン、「①実家の没落による断念②天皇・東宮との年齢の不釣合による断念③有力な皇妃への憚りによる断念④男との私通による断念」[5]の③

にあたる。史上では、たとえば、兼通女の媓子入内後、兼通生前は他の女性が入内しなかったことや、道隆女の定子入内後、道隆生前に他の女性が入内しなかったことが思い浮かぶ。後盾のしっかりした女、とくに執政者の女が入内すると、他の貴族は女の入内を控えるのである。『狭衣物語』では、「煩はしかりつる一品の宮さへ、かう世を背き給ひぬべかなるは、吾子の御宿世のめでたかるべきなりと、」（巻四、②三六〇頁）と、一品宮の存在に憚って、貴族たちは狭衣帝の後宮への女の入内を遠慮していた。一品宮は執政者の女ではないが、狭衣に譲位した前帝の同母姉妹で一品という尊貴な存在である。絶対的な決まりではないが、先に入内した女性よりも強固な後盾を持つ女性ならば入内の障りにはならないが、その逆は控える傾向にあった。それは、一般貴族の婚姻にもあてはまるだろう。物語、史上いずれにおいても、妻室が没した後に、別の女性と婚姻関係を結んだと考えられる例もある。

しかしながら、出自の高い妻室が同時に二人いる男性貴族も複数人確認できる。『うつほ物語』において、源正頼は太政大臣に婿取られた後に、嵯峨帝女一宮をも妻室としたし、『源氏物語』において、葵上を妻室とした後の源氏が多くの女性と関わりを持ったことは周知のことである。史上では、藤原忠平の妻室には宇多一世源氏順子と右大臣源能有女昭子がおり、藤原師輔の妻室には醍醐天皇皇女の勤子内親王と雅子内親王[6]がいた。藤原兼通の妻室は元平親王女と有明親王女昭子女王[7]で、藤原道長の妻室は源倫子と源明子である。具平親王女隆姫女王という妻室がいる藤原頼通に、三条天皇が褫子内親王を降嫁させようとしたこともよく知られている。後に妻室となった女性の方が出自が高いようにも思えるが、全ての用例がそういうわけでもない。『夜の寝覚』では、男君は女児の母について「ときどきうち忍びつつ通ひし所」（巻二・一六七頁）と、身分の高くない女性であるかのように語っているから、前掲した『うつほ物語』の源正頼の二人の妻室や、史上の例とは異なり、出自の高い二人の妻室を同時に持つことと同列ではないが、それでも男君は大君に「我が後か」と弁解した。男性が、現在の妻室に加えて新しい妻室を持つ理由はさまざまあろうが、政治的、経済的な事情や、別の女性への関心が生じたことなどが考えられよう。つまり、男性が新しい妻室を持たないことは、現在の妻室の後盾の確かさの証でもあり、現在の妻室に対する男性の愛情の継続の証でもあった。愛情ということで考えれば、最も新しい妻室は、現時点における男性の最も新しい愛情の対象である。男君の「我が後か」という発言は、女児の母が大君以降に愛情をかけた女性ではないこと、大君が現時点で最も新しい愛情の対象であることの主張といえる。

この主張に近い男君の主張は、『夜の寝覚』では巻五にも見える。巻五は巻二より十年が経過し、この間、物語第二部[8]で女君は老関白室となり、男君のもとに朱雀院女一宮が降嫁する。そして、女一宮の降嫁を一因として男君室の大君は没した。老関白も没した後の物語第三部、巻三では男君と女君は数年ぶりに再会し、男君は感激する。しかし、巻四で女君を名のる生霊が女一宮を苦しめ、生霊の噂に悩む女君は広沢に移った。女君を自邸に迎えるに当たり、男君は女一宮に女君とのことを説明する。

宮（＝女一宮）ばかりにぞ、おぼしめさむところ心苦しくて「これは、今始めたることにもはべらず」とて、もとよりありしさまをくはしく語り聞かせたてまつり、さまざま、「また改めて

めづらしくなど思ふべきにもはべらずは。ただ、姫君のやうやうおよすけもてまかるままに、いとうしろめたくはべれど、限りあれば、身に添へてえはべらず、よそよそなる折がちにはべるほどのおぼつかなきも、思ひ譲りて心やすくと思ひはべるばかりには、思ひたまへつきてぬを、（以下、略）」（巻五、四七八～四七九頁）

男君は、石山姫君のためには母親である女君が必要であり、女君とのことは「今始めたること」ではないこと、「改めてめづらしくなど思ふ」ものではないことを語る。男君の弁解は、先の大君への弁解と同様に自己保身が多分に見られ、真実だけを口にしているわけではないが、この弁解を聞いた女一宮は「「今よりなりとも、悪しかべいことにもあらぬを、心よりほかに、聞きにくき、苦しく」とばかり、言少なに」（巻五、四八〇頁）答えた。男君の女一宮に向けた発言や、女一宮の「今よりなりとも、悪しかべいことにもあらぬ」ということばは、恋愛関係が先に生じた女性を優位とする考えでは成り立たない。女一宮が女君よりも新しい妻室であることを男君は主張し、女一宮は、自分との婚姻の後に、より新しい愛情の対象を持ったとしても悪いことではないと言っているのである。もちろん、女一宮のことばは女一宮の本心ではなく、「いみじくおぼすとも、なほなほしき御物恨み、気色など見えさせたまふべくもあらず」（同）と、恨みのある素振りは見せない高貴な女性のたしなみゆえの発言である。

三　道長政権以降と「我が後か」

夫が新しい妻室を迎えることに対するかねてからの妻室の悲しみや恨みは、『蜻蛉日記』や『源氏物語』でも描かれる。道綱母の町小路女や近江への激しい憎悪や、『源氏物語』における玉鬘の存在に対する鬚黒の北の方の落胆、落葉宮の存在に対する雲居雁の激怒がそうである。かねてからの妻室の視点に立った場合と、『夜の寝覚』の大君のように、関わりが生じたのが遅い女性の視点に立った場合とは方向性が異なるが、関わりが生じたのが後であること、つまり、より新しい妻室であることを重視し、ことさら強調するようになったことに、時代性をみることができるのではなかろうか。

『栄花物語』続篇巻三十八「松のしづえ」は、道長による女の入内について、「入道殿は、わが御女参らせたてまつらせたまひてしかば、また他人はさし出でさせたてまつらせたまはざりき。」（③四三二～四三三頁）と記す。事実、道長女の入内後、女の生前は別の女性は入内していない。それは、道長存命中続いた[9]。頼通女（養女を含む）も同様である。禎子内親王が東宮敦良親王（のちの後朱雀天皇）のところに入内したのは道長女嬉子没後のことで、後朱雀朝で、教通女生子や頼宗女延子が入内したのは、頼通養女嫄子没後のことだった。頼通は、嫄子没後間もない生子入内に不快感を示したという。道長女や頼通女（養女を含む）のうち、彰子や妍子、そして寛子は、天皇にとっての〝最初〟のキサキではない。〝最後〟のキサキである。それは、〝最初〟を軽視したわけではなく、〝最初〟に入内できなかったからだが、道長女や頼通女が入内した後、他の貴族たちは女の入内を控えた。道長や頼通の政権は長期化し、結果、道長女や頼通女は、天皇の〝最後〟のキサキになった。道長女や頼通女が〝最後〟のキサキになったことが重なり、〝最初〟だけでは

なく〝最後〟であることが特別視されるようになったのではなかろうか。その最たる例が道長女威子で、威子は後一条天皇にとって唯一のキサキ、つまり、〝最初〟で〝最後〟のキサキである。もし、兼通が長生だったら、円融天皇の後宮には媓子しかいなかったかもしれず、同様に、道隆が長生だったら、一条天皇の後宮には定子しかいなかったかもしれない。しかし、媓子や定子は、強力な後盾であった父関白を亡くし、〝最後〟のキサキにはなれなかった。

また、『栄花物語』には、次のような後朱雀天皇と女御生子の贈答が記される。

まことや、梅壺の御方に、この春、上より、

春雨の降りしくころは青柳のいと乱れつつ人ぞ恋しき

と申させたまへれば、

青柳のいと乱れたるこのごろは一筋にしも思ひよられず

と聞えさせたまへり。御返り、

青柳の糸はかたがたなびくとも思ひそめてん色は変らず

また、御返り、

浅緑深くもあらぬ青柳は色変らじといかが頼まん

と聞えさせたまひけり。

（巻三十四「暮まつほし」③三〇九～三一〇頁）

「この春」は、『栄花物語』の記述に従えば、延子が入内した長久三年（一〇四二）春をさす。〝現存歌によれば〟という制約はあるものの、延子入内に際し、後朱雀天皇が贈歌したのは延子ではなく、寵愛する生子だった。延子入内により、生子は〝最後〟のキサキではなくなったが、それでも生子への変わらぬ思いを後朱雀天皇が生子に伝えたといえよう。

おわりに

男性側の心内において〝最初〟の妻室は特別視されていた。しかし、道長政権以降、道長女や頼通女が〝最後〟のキサキとなったことが重なり、〝最初〟だけではなく、〝最後〟であることも、重要視されるようになったと考える。とはいえ、複数の女性との関わりを持つことが社会的に認められていた当時、妻室の立場でいえば、自分が最初であろうとも、最後であろうとも、男性に他の妻室（あるいは恋人）がいることを認めなければならないことに変わりはない。男君が大君にいかに「我が後か」と強調しても、それは真の意味で大君を納得させられるはずもない。まして、〝最初〟は動くことはないが、〝最後〟はあくまでも現時点での最後であり、今後はどうなるのか不透明である。道長女や頼通女（養女を含む）の場合、女の存命中は〝最後〟のキサキであり続けたが、〝最後〟の妻室であり続けることには、女性の後盾の強固さや男性の愛情の継続が必要であり、容易なことではない。『夜の寝覚』では、この後、第二部において、男君のもとに女一宮が降嫁する。男君が迎えるのは、今上帝の同母姉妹で后腹というこの上ない出自の内親王だった。女一宮の出自の高さに加え、〝最後〟の妻室でもなくなった大君の嘆きは大きく、この降嫁を一因として大君は没した。「我が後か」という大君の立場はその後崩れ去ったわけだが、男君の主張にも正当性はあったのである。

引用は、散文は『新編日本古典文学全集』（小学館）、私家集以外の歌集は『新編国歌大観』（日本文学Web図書館）、私家集は『新

編私家集大成』（日本文学Web図書館）による。傍線は筆者。

注

(1) 増田繁夫氏『平安貴族の結婚・愛情・性愛―多妻制社会の男と女』（青簡舎、二〇〇九年）の第一章・八「後妻打ち―妻たちの嫉妬―」

(2) 青島麻子氏『源氏物語　虚構の婚姻』（武蔵野書院、二〇一五年）の第三部・第四章二「添臥」葵の上――初妻重視の思考をめぐって――」（初出『國語と國文学』八七巻六号、二〇一〇年六月）。以下、青島氏の論はこれによる。

(3) 服藤早苗氏「副臥考――平安王朝社会の婚姻儀礼」（倉田実氏編『王朝人の婚姻と信仰』森話社、二〇一〇年）

(4) ①『源氏物語』玉鬘への思いは、夫鬚黒よりも自分（＝冷泉帝）が先であるという発言。「さらば。もの懲りしてまた出だし立てぬ人もぞある。いとこそからけれ。人より先に進みにし心ざしの、人に後れて、気色とり従ふよ。」（真木柱、③三八七頁）

②『源氏物語』匂宮よりも自分（＝薫）が先に、八宮の姫君を引き取るつもりだったという薫の思い。「今は、やうやうもの馴れて、我こそ人よりさきに、かうようにも思ひそめしか、など、ありしさま、のたまひし心ばへを思ひ出でつつ、」（早蕨、⑤三五三～三五四頁）

③『浜松中納言物語』式部卿宮よりも、自分が先に姫君を見つけたことを喜ぶ浜松中納言。「式部卿の宮の、さばかりかからぬくまなく、わが思ひにかなひたらむ人をとたづね求め給ふに、えたづねより給はざりけるよ。人より先に、かかる人を見つけたるわが契りのうれしきも、」（巻四、三一八頁）

④『夜の寝覚』で女君を見初めたのは、男君が最初という評言。「また、関白こそ、憎きもののうちに入れつべけれ。中の上、人よりさきに見染めて、さばかり浅からぬ契りのほどをさしも思はず、たまたま行き逢ひても、それを、限りなくうれしくめでたしと思ひてもあらで、」（無名草子、二三三頁）

(5) 栗本賀世子氏「源氏物語の入内断念―匂宮三帖を中心に―」（『藝文研究』一〇七号、二〇一九年十二月）

(6) 勤子内親王没後に師輔と雅子内親王との関わりが生じたとされていたが、片桐洋一氏や増田繁夫氏は以下の『後撰和歌集』（巻二十・慶賀・一三八四）の歌を根拠に、それを否定された。

西四条のみこの家の山にて、女四のみこのもとに

右大臣

なみたてる松の緑の枝わかずをりつつちよを誰とかは見む

当該歌について、片桐洋一氏は「右大臣師輔は妻であった姉の勤子内親王と死別した後、雅子内親王と結婚したように思われているが、実際は初めから二人と関わっていたことがわかる。」と注する（『後撰和歌集（新日本古典文学大系6）』岩波書店、一九九〇年）。また、増田繁夫氏も当該歌を根拠に「既に雅子との関係があったにもかかわらず、さらに勤子との関係をももっていたのである。」とする（『源氏物語と貴族社会』〈吉川弘文館、二〇〇二年〉の第一章・一「摂関家の子弟の結婚」）。ただし、師輔と二人の内親王との関わりが秘密裏のものだったのか公然のものだったのかは不明。

(7) 元平親王女は天慶七年（九四四）生の顕光の母、有明親王女昭子女王は天暦元年（九四七）生の煌子と天暦五年（九五一）生の朝光の母と思われ、子女の生年は重ならない。元平親王女が没した後、昭子女王が妻室になった可能性もある。

(8) 『夜の寝覚』は中間と末尾に欠巻のあることから四部に分けて把握するのが通説となっている。

第一部――巻一、二（三巻本では上巻）

第二部――中間欠巻部分

第三部――現存巻三～五（三巻本では中、下巻）

第四部――末尾欠巻部分

(9) 『栄花物語』巻三十一「殿上の花見」には、道長が没すると、教通女や頼通養女の後一条天皇の後宮への入内が噂されたことが記される。結局、後一条天皇の後宮への教通女や頼通養女の入内はなかったが、父道長没後に後盾が弱くなった後一条天皇中宮威子の苦悩も記される。

受贈雑誌（一）

愛知教育大学大学院国語研究
愛知県立大学説林
愛知淑徳大学国語国文
愛知大學國文學
歌子
愛媛国文研究
愛媛国文と教育
大妻国文
岡大国文論稿
お茶の水女子大学國文
香川大学国文研究
學習院大學國語國文學會誌
学習院大学大学院日本語日本文学
学燈
金沢大学国語国文
京都教育大学国文学会誌
京都語文
愛知教育大学大学院国語教育専攻
愛知県立大学国文学会
愛知淑徳大学国文学会
愛知大學國文學會
実践女子短期大学部日本語コミュニケーション学科研究室
愛媛国語国文学会
愛媛県高等学校教育研究会国語部会
愛媛大学教育学部国語国文学会
大妻女子大学国文学会
岡山大学言語国語国文学会
お茶の水女子大学国語国文学会
香川大学国文学会
學習院大學國語國文學會
学習院大学大学院人文科学研究科日本語日本文学専攻
丸善
金沢大学国語国文学会
京都教育大学国文学会
佛教大学国語国文学会